



書店員の心の内には

松本 侑壬子・ジャーナリスト

インターネットは便利だけれど、緊急時以外、本は本屋で買う方が好き。ぶらぶら店内を歩き回って本棚を眺めていると、思いがけないめっけ物に出会う。これが楽しい。

始めから探す本はすぐ店員さんに頼む。プロらしくテキパキ調べてくれるのがうれしい。書店員って、やはり本好きになるものなのだろうか。本好きには、独特の雰囲気がある気がする。

この映画は、27歳の書店員と17歳の大好きな高校生の、とても純粋な恋愛映画、いや、恋愛以上の心の友の物語。性は介在しない。これが映画デビュー作となる山田あかね監督(脚本も)の思いのこもった愛おしい作品である。

「手をつないだくらいで、つながったなんて思いたくない」とか「これくらいで人間は汚れはしない」、あるいは「どんな目に遭っても回復可能。死ぬほどのことなんて、何もないんだよ」といった言葉が、ヒロインの口からさり気なく出てくるが、それが全く違和感なく心に響く。セリフのうまさば抜群だ。

書店に勤める夏樹(佐藤江梨子)は、高校生時代に援助交際の経験がある。寂しさ虚しさから人生相談に救いを求めると、「あなたは愛のわからないかわいそうな人。だから、たくさん恋愛小説を読んで勉強しなさい」という回答が来た。

片っぱしから本を読んだ夏樹は大好きな書店

員となり、27歳の今、「愛のわからない人へ」という本棚をつくった。手作りのポップやコメントも好評で、多くの人を引きつける話題のコーナーだ。ある日、そこで万引きを目撃したような気がして中年女性を追いかけるが、バッグの中には本は見つからなかった。

店長と夏樹が謝りに行った女性の自宅は、家庭内暴力の大学教授の夫、万引癖が直らない妻と登校拒否の娘という散々な家庭だった。長男・光治(柳楽優弥)は、そんな崩壊寸前の家庭を、何とか立て直そうとしている。学校でも家庭でも孤立し押しつぶされそうな不安と闘いながら、必死にもがく光治に、かつての自分の姿を重ねる夏樹。

「セックスくらい、僕だってできるよ」と言うのは光治の強がり。「たくさんの人と付き合っても、いつもさみしい」10歳年長の夏樹は、そうやすやすと恋愛を信じてはいない。現に、取引先の出版社営業マンに誘われるままに関係を続けているのだ。気持ちが通じてなんかいない虚しさを抱えたままで。

スタイルのいい人形のような童顔の佐藤の憂い顔は、本当に悲しそう。それを、2004年「誰も知らない」でカンヌ国際映画祭初の最年少・最優秀主演男優賞受賞以来、美しい瞳はそのままに存在感のある俳優に成長した柳楽が、がっしりと受けとめる。いいコンビによる忘れ難い青春映画になった。

優れたテレビ演出家、脚本家であり小説家でもある山田監督にとって、映画づくりは15年来の夢だったという。タイトルの「海」とは「死」であり、誰もがいずれ海の藻屑と消えるのだから、人生焦らなくてもいい、との壮大なメッセージが込められている。

『すべては海になる』

日本映画(119分) / 山田あかね監督

1月23日より新宿バルト9、梅田ブルク7ほか
全国ロードショー

©メディアミックス・ジャパン

